

# 受 賞 者 紹 介

(推薦調書より抜粋)

<担い手育成部門>

伴 浩 志

<技術改善部門>

内 藤 敦

<農業・農村振興部門>

渡 邊 みさ子

## 担い手育成部門



豊橋市

ばん ひろ し  
伴 浩 志

伴浩志氏は、昭和53年から教諭として愛知県立安城農林高等学校に赴任した後、平成元年より平成28年まで、主に渥美農業高等学校に勤務しました。「常に問題意識を持って、自ら築く農業にのみ未来はある」との信念を基に生徒を指導し、「農業の魅力と夢を教えたい」と地元農業高校をその象徴かつ実践的な存在となるよう、オランダ姉妹校派遣研修や同校農業担い手育成基金の創設など教育カリキュラムを超えた活動に尽力しました。また、退職後は、愛知県立農業大学校において、農業高校と農業大学校が連携した「実学」を重んじた指導・教育及び海外大学との交流機会の創出など、引き続き農業の担い手育成に尽力しました。

安城農林高校教諭、県農業教育共同実習所の研究指導主事・所長時には、農家宿泊実習や宿泊共同実習を通じて、就農に向けての意識付けや、大型農業機械の点検・安全運転などに重点を置き、免許の取得や実践的な技術力の指導に努めました。

渥美農業高校の教諭・農場長の時には、①農業高校生視察派遣事業（北海道）、②オランダ姉妹校派遣事業、③学習指導要領（農業）の改訂及び解説書編集、④「カクメロ」栽培技術の普及推進など、農業後継者育成の視点から積極的に取り組みました。

さらに、同校の教頭・校長時には、「愛知県立渥美農業高等学校担い手育成基金」をJA、企業、篤志家に働きかけて創設し、同基金の活動により、同校が地域の農業後継者育成の拠点として象徴的かつ実践的な場になるような活動をスタートさせ、その活動は現在も続いています。

退職後は、愛知県立農業大学校において嘱託教員として勤務し、米カリフォルニア大学デービス校との交流事業を学生会主体で企画するよう指導し、学生の企画力・国際感覚の向上に貢献するとともに、phメーターやECメーターなどの活用による土壌分析技術の習得を始め、農業の現場ですぐに活用できる様々な農業技術の伝授に努めました。

伴氏の教え子の多くは、農業後継者として巣立ち、現在では地域のリーダーとして活躍しています。

## 技術改善部門



西尾市

ないとう あつし  
内藤 敦

内藤敦氏は、祖父母から続くナシ栽培を引き継ぐべく、農林水産省農業者大学校卒業後、平成7年に就農しました。平成13年、こず恵氏との結婚と同時に「きらり（吉良梨）園」と屋号を定め、現在では220aの経営規模を有する大規模家族経営露地ナシ専作農家となっています。作業効率向上やGAPへの取組など、環境に配慮した様々な技術を先進的に取り入れるとともに、全量を自営直売所で販売するなど、地域の栽培技術や所得の向上に貢献し、地域農業後継者の模範となっています。

内藤氏は3代目として就農後、園地を集約、苗木の間隔を広く定植し、大型農業機械で効率的に作業できるよう園地を整備しました。その結果単位面積当たりの作業時間は県モデルの35～50%となり、家族経営による大規模経営を実現しました。作業履歴はスマートフォンに入力し、毎年の作業について適期・適作を徹底しています。環境に配慮した栽培技術として、防蛾灯による忌避効果、交信攪乱剤を利用しIPM（総合的病害虫・防除管理）を実践しています。また、毎年園地の土壌分析を行い、土壌改良材以外は有機肥料を利用するなど、おいしいナシ作りに努めています。

販売面では、自営の直売所で全量販売しています。敦氏は収穫、妻のこず恵氏は、直売所での選別・袋詰め・販売を行っています。今年からSNSによるタイムリーな情報発信や電子決済を利用した販売にも取り組んでいます。

地域の生産者が高齢化する中、定年帰農者で組織された「梨おとうさん会」の活動を通じて、摘果作業など栽培技術の普及に努め、地域のナシ生産基盤の維持を図っています。また、同世代の地域の農業後継者で食育支援団体「わらしべ」を組織し、他品目農業後継者との交流や地元量販店での産物・加工品の販売を通じて、地域の食育活動に貢献しています。

妻のこず恵氏は、市内の食育推進事業に参画し、ナシジュースの販売の傍ら、ナシの栽培や栄養などを説明し、地域住民へ農と食の重要性をアピールしています。

このように、新しい技術や取組をいち早く導入し、果樹専作農家の模範となるだけでなく、地域の農家への栽培技術の普及や農業振興に大きく貢献しています。

## 農業・農村振興部門



愛西市

わた なべ  
渡 邊 みさ子

渡邊みさ子氏は、昭和50年に海部郡立田村（現 愛西市）のレンコン農家に嫁ぎ、農業経営の傍ら、レンコン料理を考案する生活改善実行グループの活動に関わり、平成8年度には愛知県農村生活アドバイザーの第2期生に認定されました。平成16年に道の駅「立田ふれあいの里」に「はす工房」を開店し、レンコンや地元農産物を利用した惣菜の企画・販売を通じて、愛西市の農業・農村の振興、女性雇用創出、食育の推進に大きく貢献しています。

嫁ぐと同時に、両親とは独立した農業経営に携わる傍ら、生活改善実行グループの活動に加わり、現在でも、「農村輝きネット」の地区役員を務めるなど、地域の農村女性のリーダー的役割を果たしています。

昭和59年の「からしレンコン中毒事件」、平成5年以降水煮レンコンの輸入増加など、レンコン農家にとって厳しい状況が訪れる中、渡邊氏は「中国産に負けない愛西市立田のレンコンを作りたい。レンコンのおいしさを消費者に広く知ってもらいたい。」と強く考えるようになりました。

折しも、平成10年に設立された「立田村地域おこし推進協議会」、続く平成11年の「立田ふれあいの里運営連絡協議会」に生活改善部会の女性役員として加わる機会を得ました。そこで、立田村村おこし構想の一環として、「道の駅でレンコン料理を売りたい」と提案しましたが、周囲から大反対されました。しかし、「多くの人にレンコン料理を知ってもらいたい」という強い信念のもと、地域や生活改善実行グループの同志の協力と家族の合意を得て、平成16年に立田ふれあいの里の実演厨房「はす工房」を開業しました。

「はす工房」では、かつて自分が「家から外に出て活躍したい」との思いがあったことから、地域の女性が輝いて働ける職場づくりを実践しました。生活改善実行グループの時代に培ったレシピを始め、レンコンを使用した様々なメニューを提案して販売することで、レンコン料理のPRに尽力しました。その結果、店の売り上げも年々向上し、地域の女性の働く場と働きがいを提供しています。

このように、渡邊氏は地元の特産物を基軸として、地域農業や農村振興に大きく貢献しています。